中古における「〜わづらふ」の文法化について

百留康晴

はじめに

中古における動詞「わづらふ」は他の動詞に後接する場合、先行する動作を行うことが困難ないし不可能の意味を表すことがある（吉井二〇〇四）。これは中古における複合動詞「〜わづらふ」が文法化していることを示す。当時の「わづらふ」は「病気になる」「苦しむ・悩む」という二つの用法を有していた。しかし単独で使用する場合には前者の用法に偏り、他の動詞に後接する場合には後者の用法に偏るという傾向が認められる（高橋一九九八）。このことは「〜わづらふ」における文法化と深い関連性を有していると考えられる。本論では以上を踏まえ、中古における複合動詞「〜わづらふ」の表現形成のあり方および文法化の背景を論じることを目的とする。

一　先行研究

本論の先行研究として吉井（二〇〇四）がある。吉井はボイスの観点から『源氏物語』を中心に中古において不可能を表す「カヌ」「ワブ」「ワヅラフ」「アヘズ」の表現を検討している。「〜わづらふ」についてはワブ・ワヅラフがともに心理面での困惑を意味する点で共通性をもつことを踏まえ、後接するワヅラフの意味の拡張を心理的な動詞に後接するものから感覚や動作を表す動詞に後接するものへという方向で考える。その際、感覚を表す動詞を「媒介に、より動作的な動詞に下接するようになり、困難ないし不可能の意味を帯

びていった」と推測する。

吉井によれば心理的な動詞に下接するものはどのように思ってかという内容面を「思ふ」が承けて、思いのあり方をワブ・ワヅラフという動詞が輪郭づけている。こういった場合は、上の動詞について不可能や困難の意味をとることは難しく語彙的な結合という面が強い。感覚を表す動詞に後接するものは一面、継起的に関係していると見ることができるが、また一面、「聞いていられず」「見ていられず」のような意味に解し得る。「聞く」ことや「見る」ことが心悩ますことであるために、それを続けることに倦んで、続けることができないという意味に傾くためであるとする。また、より動作的な動詞に下接した例になると不可能の意味が卓越してくる。ただし、このような例でも、上接の動詞が表す動作をまったくできないというのではなく、思ったようにできないとか、継続が困難であるといった意味になりやすいと指摘する。

しかし吉井（二〇〇四）は用例収集の範囲が『源氏物語』のみにとどまり、考察対象が少ない。また複数の形式を考察対象としているためか「〜わづらふ」における文法化の過程・背景が詳細に明らかにされているとは言い難い。以上を踏まえ本論では用例収集の範囲を中古成立の仮名散文資料全体に広げ、動作を表す前接動詞にも「見わづらふ」「聞きわづらふ」のような両義的解釈が生じる可能性がないかさらに検討する。

当時の「〜わづらふ」に困難・不可能という意味を含む文法化が生じていたとすれば前接動詞が形成する節全体が後接動詞「わづらふ」の対象となるような補文関係の意味関係が成立していたと考えられる。その際、補文関係の意味関係が成立していたか否かの判断には先行する動作が未実現か、既実現か、という点が重要であると考える。そこで本論では前接動詞の意味内容に加え、その実現の有無から「〜わづらふ」における文法化の背景を考察したい。

二　中古における動詞「わづらふ」の意味用法

中古における「わづらふ」の意味用法については先行研究がある。そこで『源氏物語』の「なやむ」「わづらふ」の意味用法を詳細に明らかにした高橋（一九九八）、中村（一九九九）のまとめを引用し、中古における「わづらふ」の意味用法を整理する[1]。なおまとめにおける「なやむ」「わづらふ」は高橋（一九九八）における1を除き、全て当該動詞以外の派生動詞・複合動詞・派生形容詞・派生名詞等をも含めた「なやむ」系、「わづらふ」系の語彙の総称である。

高橋（一九九八）

1「わづらふ」「なやむ」は、全部といってよいほど、ほとんどが肉体的苦痛の意で使用されることが確認された。ともに九三%以上である。

2両語とも、比較的重く長い病気に使用される。「やまひ」「やむ」はすべて重病である。

3「わづらふ」は病気に密着し、病気そのものに力点を置いた表現であり、「なやむ」は（病気のために〈名詞「なやみ」は病気の意である〉）苦悩している様子のほうに重点の置かれた表現である（このことが最も大きな特徴で、以下の性格傾向をみることになる）。

4従って、「なやむ」には婉曲表現の性格が認められる。

5従ってまた会話文では、本人側、とくに直接本人には「わづらふ」を避けて、「なやむ」のほうを使用する傾向がある。本人に対して直接「わづらふ」を使った場合は、病気（重き）を否定し、打消し、相手を激励し慰撫する形での使用となっている。

6そのことはまた、本人が自分の病状を言う場合は、「わづらふ」を使用することを躊躇しないという、逆の様相をみせている。

7病気の初期にあっては、病気であることが把握認識できなかったり、病因が不明であったりするのは、不思議なことではない。ただ不調不快苦痛をおぼえるこの時期に「なやむ」が使用され、病気であることや不調の因が判明したところで「わづらふ」の登場となる場合がある。

8直接本人に「わづらふ」を避けること（5）には、他者には相手の「病気」の実態が分らぬゆえ、「わづらふ」を使用せずに、外にあらわれた不調の様子から「なやむ」を使用しているということもある。

9「瘧病」と「物の怪」には「わづらふ」の使用が多く、「なやむ」は比較的少ない。

10反対に、「懐妊」の場合は「わづらふ」よりも「なやむ」が多用される。ただし、出産間近になると「わづらふ」の使用に転換する例もある。これらも、3との関連で考えることができるであろう。

11「心労」に起因する場合も「なやむ」が多用される。

12「なやむ」は、名詞「なやみ」、形容詞「なやまし」、形容動詞「なやましげなり」などとともに「心地」と結びついて用いられることが多い。このことからしても、病気そのものよりも、病気によって生じる肉体的苦痛、また、不調不快、気分のあしき状態をあらわすことが分かる。

中村（一九九九）

1「なやむ」は別の状態に移行したことを表現する行為性に傾き、「わづらふ」は移行後の異常さを重視する感情性に傾く。

2「なやむ」は軽微・持続的な状態（変調）を表すが、「わ

づらふ」は緊急・重大・突発的な状態（不調）を表す。ただしこれはあくまでも相対的なものである。

3　「わづらふ」には回帰すべき正常または到達すべき理想が前提として存在するが、「なやむ」にはそのようなものは必要とはならない。

以上をもとに「〜わづらふ」の意味分析を行う。

三　中古における「〜わづらふ」の意味関係

中古において収集した「〜わづらふ」の異なり数は他の動詞に前接するもの三、他の動詞に後接するもの三〇である。[2] このことから中古における「わづらふ」の複合動詞形成では他の動詞に後接するほうが生産的であったと言える。意味の面から見ると「わづらふ」が他の動詞に前接するものは「わづらひ出づ」「わづらひそむ」「わづらひまさる」で、いずれも「わづらふ」が「病気になる」ことを表し、後接動詞は「開始」「変化結果の強調」等何らかの語彙的アスペクトを表していると考えられる（影山二〇一三）。

中村（一九九九）に「「なやむ」は別の状態に移行したことを表現する行為性に傾き、「わづらふ」は移行後の異常さを重視する感情性に傾く」とある。「わづらふ」が変化の結果に焦点が当たる動詞であるために実質的な意味を有する動詞が後接しにくく、その生産性の低さを生んでいると考えられる。

一方他の動詞に後接する「わづらふ」は単独で使用される場合や他の動詞に前接する場合と異なり、精神的な苦痛を表す用法に偏っている。次に①後接する「わづらふ」が肉体面での不調を表すのか、精神面での不調を表すのか、②前接する動作が既実現か、未実現か、という観点から「〜わづらふ」の意味構造を分析する。その結果は以下のように整理される。①からA、Bに分類し、②からBをB1〜B3に分類した。CはA、Bいずれにも分類できないものである。Aに分類されるものは少なく、多くはBに分類されることが分る。

A：病気になる。原因・様態
　起こり・重り・臥し
B：精神的苦痛が生じている。
B1：前接動詞の表す動作が実現。並列
　思し・思ひ・思ほし・悩み
B2：前接動詞の表す動作が実現。原因・様態
　聞き・聞し召し・見
　あり・ゐ・暮らし・住み・立ち・待ち
　渡り・の給ひ
B3：前接動詞の表す動作が未実現。補文関係
　言ひ・いらへ・承り・聞え・聞えさせ
　喚し・まじなひ・呼び・制し・し
　出で・来・削ぎ・立て・付け・飲み・分け

C：前接動詞の表す変化が実現困難である。

漏り

まずAに分類される複合動詞から見ていく。Aに分類される複合動詞は『源氏物語』にのみ用例が認められる。以下に用例を示す。

1「月ごろかたがたにおぼし悩む御ことうけたまはり嘆き侍りながら春の頃ほひより例もわづらひ侍る乱り脚病といふ物ところせく起り患ひ侍りてはかばかしく踏み立つることも侍らず

源氏物語　若菜下

2（紫上の病の）すこしよろしきさま見え給ふ時五六日うちまぜつつ、又おもり煩ひ給ふことといつとなくて月日を経給ふは、「なほ、いかにおはすべきにか。よかるまじき御心地にや」と、おぼし嘆く。

源氏物語　若菜下

3（髭黒の北の方は）「親の御あたりといひながら今は限りの身にてたちかへり見えたてまつらむこと」と思ひ乱れ給ふにいとど御心ちもあやまりてうちはへ臥しわづらひ給ふ。

源氏物語　眞木柱

1は柏木の源氏に対する発話に見られる「起こりわづらふ」の例である。柏木は源氏にいつもかかる乱り脚病が鬱陶しくなるほど生じ、苦痛を感じているということを述べている。病が起こることで苦痛を覚える状況が出現していると解釈できる。2は紫上の病状について述べた部分に使用された「重りわづらふ」の例である。小康状態を五、六日混ぜながら、重くなり苦痛を覚えることがいつ終わるとも知れず、月日が経っていくということを述べている。この場合「重くなる」ことと「病気になる」こととは同時に起こっており、前接動詞「重る」は後接動詞「―わづらふ」の有様、程度を表していると考える。これらは前接動詞の主語と後接動詞の主語とが一致せず、現代語の基準からすると複合動詞とは言いがたいものである。

3は「臥しわづらふ」の用例である。髭黒が玉鬘を邸に迎えようとしたために北の方が心を病み、実家に戻っている場面の例である。この例では前接動詞の主語と後接動詞の主語は同一であり、前接動詞は「わづらふ」状態である主語の様態を表していると言える。

次にB1に分類される複合動詞について見ていく。

4かくて、まことに、この男、「もの去なむ」と思ひたる気色を見て、親あけくれ呼びすゑて、「人の世のはかなきを知る知る、はるかに去なむと言ふは、親をいとふか。なを、この正月の官を召しをだに待て」と、せちに宣ふ。思ひ煩ひて、ながらふるに、

その司召しにもかからずなりにけるに、

平中物語一段

5七日。今日川尻に船入り立ちて漕ぎのぼるに川の水干てなやみわづらふ。船ののぼることいと難し。

土佐日記

4は『平中物語』の例である。無為に過ごしていた男がどこか遠くへ行きたいと考えていると、それを察した親が引き止め、この正月の司召を待てと言った。それを聞いて思い悩み、ずるずると決行を延期していると司召にもかからず、という内容である。5は『土佐日記』の例で船が難波に着き、さらに川を上って行こうとするのだが、川の水が枯れていて困ったという内容である。B1に分類されるものは類義の動詞「思ふ」「悩む」と「わづらふ」とがともに実現し、対等の関係で結合したものであり、並列の意味関係を形成する。

B2に分類される複合動詞は前接する動作が実現し、二つの動詞が原因もしくは様態の意味関係を形成するものである。前接動詞には知覚動詞「聞く」「見る」を含め、「あり」「ゐる」「暮らす」「立つ」「待つ」等動きが焦点化されない動詞が多いことが特徴である。

6これを聞くに、蔵人の少将は、死ぬばかり思ひて、母北のかた（雲井雁）を責めたてまつれば、（雲井雁は）聞き煩ひ給ひて、

源氏物語　竹河

7「雨の降りぬべきになん見わづらひ侍る。身幸ひあらばこの雨は降らじ」と言へりければ例の女にかはりて詠みてやらす。

伊勢物語一〇七段

6、7は知覚動詞「聞く」「見る」と結び付いた複合動詞の用例である。6は『源氏物語』の例である。髭黒と玉鬘の娘大君が冷泉院のもとへ院参することが噂される。噂を聞いた夕霧の息子蔵人少将は落胆し、母雲井雁を責め、雲井雁は困って、という内容である。7は『伊勢物語』の例である。男のもとにいる女に藤原敏行という男が言い寄ってきた。女は言葉も知らず、歌も詠まないので男が代わりに歌を作ってやった。敏行は手紙のやりとりを重ね、女を得た後手紙をよこした。その内容はあなたのところへ行きたいが、雨が降りそうで、空を見て困っています。私の身に幸いがあるならばこの雨は降らないだろうにという内容であった。

6、7において前接動詞「聞く」「見る」の表す動作は実現している。そしてそのことを通して主語となる人物が「わづらふ」という状況が発生している。その意味で前接動詞の表す動作は後接動詞「わづらふ」の意味内容が成立する原因となっている。しかし、実際

の用例ではこれらの複合動詞が表す内容は比較的長い時間継続された動作であり、「わづらふ」状態となっている時点を描いている。その点から見ればこれらの意味関係は様態とも解釈できる。

B2には知覚動詞「聞く」「見る」以外の動詞が「わづらふ」に前接するものがある。以下に用例を示す。

8（中宮の）仰せごとのあれば、いとうれしくて見る。浅緑の紙に、宰相の君いとをかしげに書い給へり。

いかにして過ぎにしかたを過ぐしけん暮らし
わづらふ昨日今日かな

となん。　枕草子三〇一段

9桂のみこの御もとに嘉種が来たりけるを母御息所聞きつけて門をささせたまうければ（嘉種は）夜一夜立ちわづらひてかへるとて「かく聞へたまへ」とて門のはざまより言ひ入れける。　大和物語七六段

10（夫兼家は）れいのほどにものしたれど（作者は）そなたにも出でずなどあれば（兼家は）ゐわづらひてこの文ばかりをとりてかへりにけり。　蜻蛉日記

8は『枕草子』の例である。作者が物忌みのため宮中から人の家へ退出したところ退屈さがつのり、今すぐにでも中宮のもとへ参上したいと思うようになった。その時中宮から手紙が届き、そこに書かれていた歌の例である。歌の内容はあなたが出仕する前はどのように過ごしていたのでしょうか、退屈で暮らすことに困る昨日今日です、というものである。「暮らしわづらふ」は退屈で暮らすことに困ることを表している。

9は『大和物語』の例である。宇多天皇の皇女、孚子内親王のもとへ源嘉種が来た。母御息所がこれを聞き付け、鍵をかけて門を閉ざし、嘉種を入れなかった。嘉種は一晩中邸の外に立ち、苦しんで、帰ると言って、歌を詠んで隙間から中へ言ったという内容である。10は『蜻蛉日記』の例である。作者と夫藤原兼家とが長歌を贈り合う場面の例である。作者は胸中を語った長歌を書き、二階棚の中に置いた。いつものように夫はやって来たが、作者は出て行かなかったので、夫はとどまりづらく、手紙だけを取って帰って行った。

これらの前接動詞「暮らす」「立つ」「ゐる」はいずれも継続的な動作を表すが、動きに焦点が当たらず、静止状態がイメージされる動詞である。他に「あり」「住む」「待つ」も同様の性格を持つと考えられ、このような前接動詞はB2に分類される複合動詞の多くに見られる。これらの「〜わづらふ」では前接動詞の表す動作が一定時間継続し、その中で苦しむ、困るという感情が主語に生まれてくる。そして、「わづらふ」状態が生まれた後は、前接動詞と後接動詞の表す動作は

同時に起こっていると感じられ、様態としての解釈が生まれてくると考えられる。

B3は前接動詞の表す動作が実現せず、二つの動詞が補文関係の意味関係を形成すると解釈されるものである。前接動詞には「言ふ」等発話によって目的を達成する動詞の他、「出づ」「来」「す」「削ぐ」等様々な動きを伴う動作動詞が含まれる。以下に用例を示す。

11その前に立つる車はいみじう制するを、「などて立つまじき」とてしひて立つれば、いひわづらひて、消息などするこそをかしけれ。　　枕草子二三七段

12（四の君が）少輔はいとにくき物に思ひしみてすげなくのみもてなしければ（少輔は）来わづらひてなん有りける。　　落窪物語

13やむごとなき人などのまゐり給へる御局などの前ばかりをこそ払ひなどもすれよろしき人は制しわづらひぬめり。　　枕草子　一本二八段

11は『枕草子』の例で、自分の前に立てる車をきつく制するのに相手は「どうして立ててはいけないのか」と言って無理に立てるので、言うのに困って、という例である。12は『落窪物語』の例で四の君が少輔（面白の駒）を憎らしい者と心底思いこみ、すげなくあしらったので来にくくなっていたという例である。13も『枕草子』の例で、初瀬にお参りする時高い身分の方が参詣されるお局の前は人払いをするが、それほど高くない身分の人の場合は制し切れず、困るようだ、という例である。これらの例ではいずれもこの場面以前には同じ動作を行ったのかもしれないが、この場面では前接動詞の表す動作が未実現であると判断される。

Cは前接動詞の表す変化が実現困難であることを表すもので、Cに分類されるのは「漏りわづらふ」のみである。二つの動詞はB3と同じく補文関係の意味関係を形成するが、前接動詞の表す動作が未実現であるとは言えない。以下に用例を示す。

14六月十日余りいと暑き昼つ方（狭衣は）一條の宮にて若宮具したてまつりて端つ方に涼み給ふに、にはかにかき曇りて村雨のおどろおどろしきに柏木の木下風涼しう吹入りたれば御簾少し上げて見出し給へるに中に柏木はげにいたく漏り煩ふ。　　狭衣物語

狭衣が若宮を伴って一條の宮で涼んでいると、突然天候が悪くなり、雨が降りだした。狭衣が外を見ると柏木がたいそう雨が漏れにくく見えたという例である。中古における「わづらふ」は主語に「人」をとる動詞である。しかし、この「漏りわづらふ」では雨がその主体に拡張され、自然現象を外から眺めている狭

衣の判断が表されていると考えられる。

四　中古における「〜わづらふ」の意味拡張

これまで中古における「〜わづらふ」を意味の面からA〜Cに分類し、その具体的な様相を記述してきた。次にこれらの意味拡張の過程と背景について考察する。初めに全体的なことについて述べる。Aに分類されるものは表1から用例が『源氏物語』にしか認められず、数も少ないことが分る。また「わづらふ」の意味も「病気になる」という単独で使用される場合に多いものである。そこでB1・B2に分類されたものからB3・Cに分類されたものへという意味拡張の道筋を想定する。また表1からこれらの用例が確認できる資料を見ると、いずれも古い時期からその出現が認められる。したがって、意味の拡張も同時期に生じているということになる。

Aに分類されるものには用例数および用例が確認される資料の問題以外に「起こりわづらふ」「重りわづらふ」を構成する二つの動詞の主語が一致しないという問題がある。さて『源氏物語』には「起こる」「わづらふ」が共起する例や「重くわづらふ」という用例が複数認められる。以下の用例がそれである。

15おほい殿（葵上）には御物の怪いたう起りていみじ

表1中古「〜わづらふ」の意味分類別用例数

	前接動詞	用例数	計
A	起こり	源氏1	1
A	重り	源氏1	1
A	臥し	源氏1	1
B1	思し	竹取1　うつほ5　枕1　源氏22　夜4　浜松3　狭衣3　栄花2	41
B1	思ひ	平中1　蜻蛉1　うつほ11　大和4　枕1　源氏16　夜2　浜松4　更級2　狭衣1	43
B1	思ほし	うつほ7　源氏1	8
B1	悩み	土佐1　浜松4	5
B2	あり	うつほ1　浜松1	2
B2	聞き	うつほ2　源氏1	3
B2	聞し召し	源氏1	1
B2	暮らし	枕1	1
B2	住み	うつほ1	1
B2	立ち	うつほ1　大和2　源氏8　狭衣2	13
B2	の給ひ	源氏1	1
B2	待ち	うつほ2	2
B2	見	伊勢1　落窪1　源氏8	10
B2	渡り	更級1	1
B2	ゐ	蜻蛉1　栄花1	2
B3	出で	蜻蛉1　浜松1	2
B3	言ひ	平中1　落窪1　枕1　源氏2　浜松2　栄花1	8
B3	いらへ	蜻蛉1	1
B3	うけたまはり	うつほ1	1
B3	来	落窪1	1
B3	聞え	落窪1　うつほ2　源氏6　夜2　狭衣2　栄花1	14
B3	聞えさせ	栄花1	1
B3	し	うつほ4　浜松1	5
B3	制し	枕1	1
B3	削ぎ	源氏2	2
B3	そそのかし	源氏1	1
B3	立て	源氏1	1
B3	付け	枕1	1
B3	飲み	うつほ1	1
B3	まじなひ	源氏1	1
B3	呼び	更級1	1
B3	分け	うつほ1	1
C	漏り	狭衣2	2

うわづらひ給ふ。
源氏物語　葵

16僧召して御加持などせさせ給ふ。（紫上は）そこ所ともなくいみじく苦しくして胸は時々おこりつつわづらひ給ふさま堪へがたく苦しげなり。
源氏物語　若菜下

17（朱雀院の）御賀は廿五日になりにけり。かかる時のやんごとなき上達部（柏木）のおもく患ひ給ふに、親はらから、あまたの人々、さる高き御なからひの嘆きしをれ給へる頃ほひにてものすさまじきやうなれど
源氏物語　若菜下

これらは複合動詞ではないが、意味の上では「起こりわづらふ」「重りわづらふ」の表す内容と一致する。そのため「起こりわづらふ」「重りわづらふ」はこれらの文を下敷きとして臨時的に生み出された蓋然性が高いと考える。「臥しわづらふ」については前接動詞・後接動詞の主語も一致し、「臥す」「わづらふ」が文中で共起する具体的な用例も見いだせなかった。しかし病気になれば横になるという状況は生まれやすく、両者は結びつきやすい動詞の組み合わせであると言える。

次にB1・B2に分類されたものからB3に分類されたものへという拡張の道筋について考えてみたい。B1・B2に分類されたものとB3に分類されたものとは前接動詞の表す動作が実現しているか、していないかという大きな違いがある。このことは当該表現における文法化の発生にも大きく影響する点である。またB3に分類されたものが意味の面で語となっていることを示すものであると言えるかもしれない。

さて中古において「わづらふ」が単独で使用される場合「病気になる」等肉体面の不調を表す用法に偏るとのことであったが、全てがそうであるわけではない。高橋（一九九八）では『源氏物語』における精神面の不調を表す用例が四例示されている。以下にその用例の一部を引用する（下線は筆者が付した）。

18こなたかなた、心をあはせて、はしたなめ、煩はせ給ふ時もおほかり。
源氏物語　桐壺

19「うちより、かゝる仰言のあれば、『さまざまに、あながちなるまじらひの好み』と、世の聞き耳も、いかゞ」と、思ひ給へてなん、わづらひぬる」と、きこえ給へば、
源氏物語　竹河

18は「帝寵を一身にあつめる桐壺更衣に嫉視する女御・更衣たちが、示し合わせて意地悪をし、「困らせる」」例である。また19は「玉鬘が、あれこれ高望みして宮仕えをしたがると世間から取り沙汰されること

を「気にしている」と、夕霧に申し上げているところ」の例である。これらの例では「わづらふ」が「病気になる」ことを表しているのではないことが分る。

このことからBに分類される「〜わづらふ」における後接動詞の意味が複合動詞中で生じたとは必ずしも言えないということが明らかである。また「病気になる」という意味は具体的過ぎ、複合動詞を形成する上で生産的でなく、逆に「苦悩する」といった意味のほうが抽象的であるがゆえに前接動詞の作り出す幅広い文脈に対応でき、生産的であったとも考えられる。

次にB1に分類されるものはその殆どが「思ひわづらふ」とその敬語表現である。これらの延べ数は他の「〜わづらふ」と比べ、格段に多い。「思ひわづらふ」は『万葉集』に以下の20に示した用例が認められ、これは「〜わづらふ」の『万葉集』中唯一の用例である。

20 五月蠅なす　騒く子どもを　打棄てては　死には
知らず　見つつあれば　心は燃えぬ　かにかくに
思ひ煩ひ（思和豆良比）音のみし泣かゆ
万葉集巻五・八九七

これらから「思ひわづらふ」が古くから使用され、中古では人口に膾炙した表現となっていたことが窺える。複合動詞は連用形で複数の動詞を結ぶため、形成する意味関係に解釈の幅が生じる。「思ひわづらふ」には並列以外にも「思ひ」つつ「わづらふ」という様態の解釈や「思ふ」ことで「わづらふ」状態になったという原因での解釈が可能である。歴史的に見れば「思ふ」という動詞の果たす幅広い役割が「〜わづらふ」の意味関係に関する複数の解釈を可能にし、Bに分類される多くの複合動詞を生み出したのだと考える。

ここでB1・B2に分類されるものとB3に分類されるものとの意味上の連続性について考えてみたい。前述の通り、用例を観察するとB1・B2に分類されるものは前接する動作が比較的長い時間継続している。B2に分類されるものにおいてはそれを契機として主語は苦悩するわけであるから、その動作は早晩継続を回避、ないしは断念されるのが自然である。そこでB2に分類されるものにおける一連の展開を前接する動作から示すと21のようになる。

21　実行　→　苦悩　→　継続回避・断念

B3に分類されるものは前接動詞が表す動作が実現しない。しかし、用例を観察すると、前接する動作は通常実現するのだが、その時は実現しないという状況を述べているものが多い。B3に分類されるものにおける前接動詞は日常的に行う動作を表すものであるのでそれは当然のことである。そしてその動作を試行することの継続はその後回避、ないしは断念される。21のよ

うに一連の展開を示すと22のようになる。

22　試行　↓　苦悩　↓　継続回避・断念

したがって、B2・B3に分類されるものは前接する動作が実現するか、しないかの違いはあるものの一連の展開は類似しているということになる。またB2に分類されるものには以下に示したようにB3に分類されるものと同種の前接動詞を持つ「のたまひわづらふ」「渡りわづらふ」が含まれている。

23（弁）少将「かの西の対にすゑ給へる人（玉鬘）はいとこともなきけはひ見ゆるわたりになむ侍るなる。兵部卿の宮などいたう心とどめてのたまひわづらふとか。「おぼろけにはあらじ」となむ人々推し量り侍める」と申し給へば、　源氏物語　常夏

24水うみのおもてはるばるとして、なでしま、竹生島などいふ所の見えたる、いとおもしろし。勢多の橋みなくづれて、わたりわづらふ。　更級日記

23は『源氏物語』の例である。弁少将は父内大臣に玉鬘の話をし、蛍兵部卿宮などが熱心に言い寄っているものの源氏が許さないことに思い悩んでいるなどということを伝えたという内容である。24は『更級日記』の例である。この例では作者が父の任地から京へ戻る途中琵琶湖を過ぎ、瀬田の橋を渡る際、橋が崩れていて苦労したことが述べられている。

これらの例では主語である蛍兵部卿宮や『更級日記』の作者が意志をもって「言ふ」「渡る」という動作を行い。それが順調にいかないことが表されており、B2に分類されるものからB3に分類されるものへの拡張の課程から見ると中間的な存在であると見られる。特に注目したいのは23の例である。この例では「言ふ」ことは実現していないのだが、そのことによって期待される結果は実現していない。そのことはB3に分類されるものが持つ意味構造を生み出す媒介と成り得るのではないか。現に「言ひわづらふ」「聞えわづらふ」「聞えさせわづらふ」はB3に分類される。

最後Cに分類される「漏りわづらふ」は発展した形であると考えられる。前接動詞の表す変化の実現が困難であると見る観察者の捉え方が示されている。B3に分類されるものとその点で類似するが、Cの類型はその後発展することはなかった。人を主語とする動詞を前接動詞とせざるを得なかった、中古の「〜わづらふ」における文法化の限界を示すものである。

五　まとめ

本論では困難ないし不可能の意味を表すとされる中

古の複合動詞「〜わづらふ」における文法化の背景を考察した。その結果、後接する「わづらふ」の意味、前接動詞の表す内容が実現しているかいないかという点から「〜わづらふ」をA・B1・B2・B3・Cに分類し、「〜わづらふ」における一連の意味内容の展開の類似性という観点からB2からB3への意味拡張すなわち文法化の背景を明らかにした。

吉井（二〇〇四）に以下の指摘がある。「これらの形式が表す不可能は、それぞれの個性を越えて、心理的な要素を色濃くもっている」。「その心理のあり方が状況に規定されたものである点から、状況可能と能力可能という選択肢の中では、状況可能に入れるべきかと思われる」。「これらの補助動詞の場合」、「状況から与えられた心理的条件に依存しており、状況から独立した不可能性を表す傾向に乏しいことになる」。

中古の「〜わづらふ」に見られる文法化はこのように状況をベースとした「〜することが困難である」という複合形容詞的なものであった。その限界は前接動詞を無意志動詞に拡大することができなかったことにも表れている。しかしそこには登場人物の心情を推し量る表現主体があり、心情の介入がある。このような感情動詞が後接し、補文関係を形成するほど発達するという文法化のあり方は中古語複合動詞の特徴を明らかにする上で重要であると考える。

注

1 高橋（一九九八）、中村（一九九九）における考察対象は当該動詞のみならず、当該動詞が形成する複合動詞、対となる他動詞「なやます」「わづらはす」、派生形容詞「なやまし」「わづらはし」、派生動詞「なやましがる」「わづらはしがる」、派生形容動詞「なやましげなり」「わづらはしげなり」、派生名詞「なやみ」「わづらひ」「なやましさ」「わづらはしさ」をも含んでいる。また高橋（一九九八）は「やまひ」「やむ」との比較も行っている。

2 ただしこの異なり数は「思しわづらふ」「思ほしわづらふ」を「思ひわづらふ」に、「聞こえわづらふ」「聞こえさせわづらふ」「の給ひわづらふ」を「言ひわづらふ」に、「聞し召しわづらふ」を「聞きわづらふ」にそれぞれ含めて算出した。

参考文献

青木博史（二〇一三）「複合動詞の歴史的変化」影山太郎編『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』ひつじ書房

影山太郎（二〇一三）「語彙的複合動詞の新体系—その理論的・応用的意味合い—」影山太郎編『複合動詞研究の最先端—謎の解明に向けて—』ひつじ書房

金水敏（二〇〇六）『日本語存在表現の歴史』ひつじ

書房
高橋巌（一九九八）「源氏物語の「なやむ」と「わづらふ」」『東北学院大学論集 人間・言語・情報』一二一
中村一夫（一九九九）「源氏物語における不調の表現の類義関係―「なやむ」「わづらふ」を中心にして―」『国語年誌』一七
吉井健（二〇〇四）「中古における不可能を表す補助動詞―カヌ・ワブ・ワヅラフ・アヘズ―」『国語語彙史の研究二三』和泉書院

調査資料一覧

伊勢物語・大和物語・平中物語・土佐日記・蜻蛉日記・紫式部日記・和泉式部日記・更級日記・落窪物語・源氏物語・枕草子・堤中納言物語・狭衣物語・夜の寝覚（以上『日本古典文学大系』岩波書店）・万葉集・うつほ物語・浜松中納言物語・栄花物語（以上『新編日本古典文学全集』小学館）

・ジャパンナレッジ『新編日本古典文学全集』小学館
・国文学研究資料館『日本古典文学大系本文データベース』http://base1.nijl.ac.jp/~nkbthdb

（島根大学教育学部准教授）